あひる生きとれよ

いのちのつながりを求めて

河原正美

あひる生きとれよ

いのちのつながりを求めて

河原正美

著者紹介

河原正美（かわはら　まさみ）

1947年生まれ。
草島昇と通信『群生』（年2回）を発行している。
現在、小松市立能美小学校教諭。
現住所：〒923 石川県小松市加賀八幡辛271～2
TEL　0761－47－0168

草島　昇（くさじま　のぼる）

1955年生まれ。
石川県立小松瀬領養護学校卒業。詩集『生と人、すくの雨になりたい』がある。
現住所：〒923-01 石川県小松市瀬領町 陽光園内

埼玉県立図書館

あひる生きとれよ——いのちのつながりを求めて

昭和57年2月25日　初版発行
昭和57年3月5日　3版発行
〈検印廃止〉

定価 1200 円

著　者© 河　原　正　美
発行者　亀　岡　邦　生

発行所　株式会社　**樹　心　社**
〔〒186〕東京都国立市富士見台1丁目7番地1－5－403
振替・東京　7－75445　／　電話　0425－77－2778

発売元　株式会社　**星　雲　社**
〔〒101〕東京都千代田区神田錦町3丁目6番地
電話　03－294－5818

印刷／文弘社　製本／小泉製本　装幀／中村三九男

ISBN 4－7952－2406－4　C0037　¥1200E

序文

素晴らしい出会い

高史明

人生の途上で、ふと立ち止まり辺りを見まわすとき、人はきっと、そこにかしこに横たわる深い苦を、意識せずにはおれないだろう。喜びの座にも、楽しみの最中にも苦が潜(ひそ)んでいる。人生とは、苦にまみれている、とはいえ私は、何もそれを厭世観(えんせいかん)から言うのではない。

人が苦に落ちて、そこでいのちまで見失ってしまうことがあるのは、人生を苦と見たからと言うより、苦と見ていなかった結果ではあるまいか。人生を苦と見るのは、決して厭世観ではない。むしろ人は、この人生の事実を、まっすぐに見つめてこそ、どのような幻想にも覆(おお)われない喜びや楽しみを得ることができると言える。苦は、それをまっすぐ見つめるとき、その見つめる人の優しさを磨(みが)き上げるものである。ここに挙(あ)げる小学生の詩「妹」は、その間の事情をよくよく示していると言ってよいだろう。

「保育所から／帰ってきた妹が／『にいちゃん、頭がいたいよ。』と、ぼくによってきた。／お

母さんは、病気でねている。／『がんばれよ。がんばるんでえ。』と、頭をなでてやった。／ぼくの手に／妹の熱が　つたわってきた。／かわいそうで／つめたいぼくの手を／じっと　ひたいにあててやった。／『きもちいいよ。』／と妹が言った。／ぼくは／妹の小さな頭が／ぼやけて見えた。」

なんと素晴らしい優しさであろう。もう一つ詩を挙げてみたい。「よわ虫」である。

「ぼくはよわ虫／何にも言えないよわ虫。／だれにも負けないよわ虫。／顔で笑って／心で泣いて／人には笑顔を忘れるな。／これが母ちゃんの口ぐせ。／でもぼく／顔でも泣く／心では／もっともっと泣くよ、／本当によわ虫。／一番だ。」

なんと熱く強い優しさであろう。この少年の父親は、自らいのちを断(た)っていた。そして母親は、目が不自由で白い杖の助けを必要としていた。どうして少年が、泣かずにおれるだろう。少年の名は、岡崎宏美君と言う。宏美君は、この苦とまっすぐ向かい合うことができたとき、この詩を作り出すことができたのだった。もし死んでいたら、この詩も生まれていなかったであろう。

ところで、宏美君には、その苦と向かい合い、いのちの優しさに気づくことの大事さを教えてくれた人がいた。宏美君の次の言葉に注目していただきたい。

「ぼくは、お兄ちゃんと知り合って、もう一年あまりになります。それまでのぼくは、つらい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことばかりで、楽しいことなんかひとつもなかった。こんな世の中を誰が作ったのかと、にくらしく思う。毎日毎日泣いてばかりで、今思うと、あの当時、ぼく達は大きな池の中でおぼれて、死にかけていたような気がする。そこへお兄ちゃんが大木をなげてくれました。必死につかまって助かったんです。(後略)」

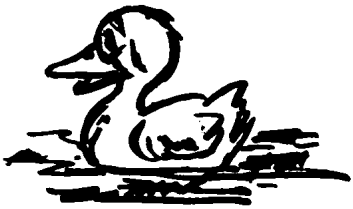
「お兄ちゃん」が、死の淵にあった宏美君一家三人のいのちへ、生の力を吹きこんだ人である。その人は、草島昇君と言う。草島君は、いったいいかなる力の持主なのであろうか。死の淵にあった三人のいのちへ、生の大木を投げたと聞けば、誰もがきっと、そう自問することであろう。しかし、草島君は、特別な力などまったく持ち合わせていないのである。それどころか、草島君は自由に動く手も足もない、重度の脳性マヒの困難を生きる青年である。だがまた、その草島君なればこそ、三人のいのちへ生を吹きこむことができたとも言える。草島君が必死に生きぬこうとする姿こそ、その悩みや苦しみとともに、いのちの強さ優しさ、しなやかさを教えるものでなくてなんであろう。

草島君は、寝たきりの身で、わずかに自由のきく左足の小指を動かして、タイプライターを打つ練習を積んだと言う。この血のにじむような努力を重ねたあと、ついに草島君は、足の小指で打つタイプライターから、生の歌を心の詩を打ち出しはじめたのである。宏美君の言う「大木」

とは、草島君の詩集『ひとしずくの　雨に　なりたい』である。まさしく草島君と岡崎さん一家の出会いこそは、いのちといのちの出会いと言えるだろう。それは限りなく美しい。

しかし、この出会いは、それだけで忽然と生まれたものではなかった。草島君が足の小指でタイプライターを打つ練習を積み、そこに心の言葉を刻みつけはじめたとき、その生の尊厳に深い眼ざしを注ぎつづけていた人がいた。本書の著者、河原正美さんである。河原さんは、草島君の詩作を励まし、やがてそれを一冊の詩集にまとめるのである。その詩集が、絶望のどん底にあった宏美君のお母さんの全身を打ったのだった。人の人生は、数知れない出会いの連鎖であると見ることもできるが、それにしてもここにひらかれている出会いは、なんと尊いものであろう。私はこの出会いから溢れる光に、頭を下げずにおれない。いのちの強さ、優しさ尊さを教えられ、この身が励まされ力を与えられるように思えるのである。

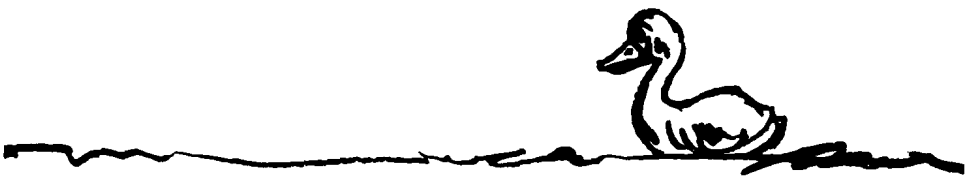
あひる生きとれよ／もくじ



序文……高史明

一章　タイプライターのうた

なんで　しょうがいしゃに　うんだんや……11
おきなかった　あいつ……20
ぼくには　し　しかない……29
ひとしずくの　雨に　なりたい……35
ぼくたちのこと　わかってほしい……47
共に生きる証(あかし)として……54



二章　生への執念を

いのちの手紙……59
気持が話しかけてくる……72
もう逃げ道はさがしません……82
元気でいてね、母ちゃん……94

三章　心の中に深くしまわれたものを

『どらごえあげて』の仲間として……105
とうとう何もかも話してしまった……113
お兄ちゃんに心をひらいて……126
アヒルよ　なくな……130

四章　いのちのつながりを求めて

広島へ――岡崎さん母子を訪ねて……161
うれしい思い出をありがとう……165
吾一少年のように……169
前むきに強く生きるんだ……176

あとがき

そうてい・カット　中村三九男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一章　タイプライターのうた

なんで　しょうがいしゃに　うんだんや

たんじょうび

きょうは　ぼくの　たんじょうび
はちかげつごで　みじゅくじ　だったそうだ
ろっかげつしか　ふつうの　こ　ども
いられなかったそうだ
はいえんで　しにそうだったそうだ
ぼくが　しと　ひきかえに　うけとったものは
のうせいまひと　ひといちばい　つよい　きんちょう
だけど　ぼくは
にじゅうさんねんかん　いきている

いろんなひとに　ささえられながら
きょうは　たんじょうび　ぼくの……

たちあがり

かたひざだちから
ぐっと　ひだりあしに　ちからを　いれる
すると　めのまえの　けしきが
だんだんと　あがっていく
まっとの　うえに
りょうあしを　きちんと　そろえて
こしを　のばす
なんだか　きゅうに
ぼくが　おおおとこに　なったような　きぶんになる
せなかから

じゅわり　じゅわりと　あせが　でてきた
ちょっと　からだが　ゆれた　はずみで
うしろに　ひっくりかえって　しまった
だいのじになって　おおいきを　ついている
ああ　てんじょうが　とおくに　みえてしまう

ひとつの　せかい

くるまいすから
いっぽ　あしをだして　たちあがると
そこは　ぼくの
だれの　ちからも　かりることのない　せかいだ
あしもとが　すこし　ふるえている
ぼくの　せかい

ぱん

ひるごはんに　ぱんが　でた
かんごにんさんの　くるのが　まちきれず
かおごと　ぱんに　くらいつく
ぱんは
くちもとから　つるりっと　にげた
「ちきしょう！」と
からだに　こおりついたような　てを　うらむ
だれか　てを　くれないか
じゆうに　つかえる　てを　くれないか
と　つぶやきながら
にげる　ぱんを　おいかける

ぼくが、この詩の作者である草島昇君と初めて出会ったのは、第二石川整肢学園教場（現在の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com